

2月18日（火）

珍しくも、一日中晴れ

打ち合わせの続きと、知識の交換をする。

9時少し過ぎにスタジオに到着。マキシーンさんとミーティングをはじめ。最初に話したのは、これからどうコラボレーションを進めていくのか、ということだった。ディレクターのレスリー・ミラーさんからマキシーンさんのところにこのプロジェクトに関しての書類がいろいろ送られて来ていたので、ここ何日かはこの英文を読んで過ごしていた。そのなかに1週間に1日、2人で過ごさない、とある。

わたしたちは原則的に火曜日をその日にあてることにした。マキシーンさんの授業や会議のない日、すなわち研究日は火曜日なので、実質その日以外では、一日中マキシーンさんの予定をあけるのは無理なのであった。

この日は到着してはじめてのミーティングの日。すごくいろいろな情報をマキシーンさんにもらった。

はじめにもらった情報は、刺繍の本だった。とてもページ数が多くてカラー図版がたくさん用いられている本で、いろんな刺繍が紹介されている。わたしの興味を引いた刺繍のステッチは、布の上を覆うような、たとえば繕いものをするときのものが多かった。こういった繕いもののステッチはダーニングステッチといって、いろいろなバリエーションがあるそうだ。そのなかでも、特に布の上にもう一枚布を加えるように補強するステッチに目をうばわれた。というのも、11年前に中国貴州省の貴州民族学院に留学している時に調査した、少数民族の苗族の刺繍との間に共通点を見いだしたからである。こんなに時間がかかって根気もいる仕事に、どちらの人々も誇りをもって取り組んでいる

（または、いた）ことから、手仕事に対する並々ならぬ情熱を感じとることができたのである。そこから農民のスモックに話は広がり、いくつかの非常に興味深い話を聞くことができた。日本ではスモックは幼稚園児が着るものであるとの認識が定着しているが、こちら英国では労働する人が着ていたようで、大人が着ている古い写真をよくみかける。基本的に四角い布にギャザーを寄せて、運動のためのゆとりを確保している。四角く裁断することで、布の無駄も出にくくなる。

わたしが日本から持って行った、中国の苗族の刺繍や織の布をマキシーンさんにみせていると、取材の方々がスタジオに入って来た。布を2人で見ているところをばちばちと写真に撮ると、すぐどこかに行ってしまった。21日金曜日に発行のチェスターの地方紙に載るそうである。すぐ近くにある大きな事務用品屋さんに車で連れて行ってもらったり、雑誌のバックナンバーの情報をもらったり、このコラボレーションについてマキシーンが思っていることを書いた紙をもらったりと、コラボレーションに必要と思われるいろいろな情報をもらう。午後に、日本から持ち込んだわたしのきものについてちょっと説明をして、マキシーンさんに着付けてあげた。サイズはほとんどぴったりで、色やデザインもとてもよく似合っていた。きものを着ることをとても楽しんでいたので、とてもうれしかった。きものに必要なもの一式を包んできたふろしきをほどこところから始まって、きものを包んでいる「たとう紙」、きものの畳み方についてについてなどなど、きものに関わるこまかなディテールがとても興味をひいたよ

うだった。現在の日本では、きものはそんなに頻繁には着られなくなってきている。自分できものを着ることができる人の数もずいぶん減っているようだ。実際、わたしの友人で自分できものを着ることができる人は片手で数えるくらいしかない。わたしは大学を出たあとに、地元の公民館の着付け教室に通って着方を教わった。大学で学んでいるときに2枚きものをたてよこ緋で織っていたのに、自分で着ることができないのはおかしいのではないだろうか？と思ったので、着方を習うことにしたのだ。きものを着ると行動がきものの形から来る制限をうけることになる。たぶん一番最初に気付くのは、歩き方だ。歩幅を小さくしないとひざ下の布がおおきくひるがえって、歩きにくい。ところで、わたしの持って来たきものは、この後わたしを含めて6人が袖を通すことになる。みんなそれぞれによく似合っていた。そのうちの一人、マティーナさんは当時「Geisha」という本を読んでいたもので、それに合わせて襟を大きくぬいて芸者風のセクシーな着付けにしてあげた。ロンドンのヴィクトリア&アルバートミュージアムで、テキスタイルの展示室に置いてあるきものをゆきずりの高校生の女の子2人に着付けてあげたのを合わせると、計8名にきものを着せてあげた。どれも半幅の帯で簡単に結んだだけだけれど、みんな大変よろこんでくれた。8月のチェスター滞在には夏用のきものを持って行く予定、もちろん希望者には着付けてあげますよ！お気軽に申し出てくださいね。

3月26日（水）

晴れ

前半の滞在のおわりに。

月並みだけれど、あっというまに過ぎた47日間の滞在だった。到着の日に初めてマキシーンさんに会った時に、二人とも同じ生地で色違いのダッフルコートを着ていた。こんなささいな偶然から、わたしはこのプロジェクトの快調な出発を予感したのだ。

職場である大学の授業は新しいセメスタを迎えたところで、超多忙なスケジュールの合間を縫って、わたしが活動しやすいようにあれこれと気をつけてくれたマキシーンさんに、本当に感謝している。そして、この出会いを用意してくれたディレクターのレスリーさん、いつも有益なアドバイスをくれた日本のコーディネーターの川嶋さんのお二人にも感謝の意を表したい。

わたしは自分の仕事の都合上、2回に滞在を分けている。期間前半にあたる2、3月の滞在は、「できるだけ見聞をひろめよう！」ということを中心とした。英国に、というよりもヨーロッパに来たのはこれが初めてで、まずこの文化に親しむことが、今後の活動の助けになると思ったからだ。ロンドンには2回の短期旅行、近場のマンチェスターにマキシーンさんと共に1回、週末日帰り2回、リヴァプールは1回訪れた。美術館、博物館のはしごをしていると、あっという間に時間が過ぎていった。こんな感じでコラボレーションはゆっくりと始まった。そして帰国の約1週間前に、作品制作のプランを実現に向けて展開し始めた。残り少ない滞在期間で、プランの詰めとそれぞれの担当部分を制作するための打ち合わせをおこなった。

期間後半は8月のはじめからスタートする。それまでに、できるだけ作業は日本でおこなっていくつもりだ。マキシーンさんとわたしの作品の共通点のひとつに「膨大な量の作業の積み重ね」がある。帰国したら、わが家の工業用マシンは大活躍することになるだろう。夏から初秋にかけての滞在期間中は、チェスターに腰を落ち着けて、作品の制作に集中するつもりだ。

最後になりましたが、このプロジェクトに賛同したスポンサーとして、わたしの英国滞在を受け入れて下さったチェスターカレッジとその関係の皆様、どうもありがとうございました。8月にまた帰ってきます！

新田恭子